



月夜話

3039
8



飯島三省

種相成

傳記

半月夜話後編卷之三

江戸

白頭子柳魚 編次

第拾五回

鍾愛女逆髪

陸奥外が濱といへる海濱の。菅屋軒を並べ魚をと
りて其日を送る。藻汐を焼てうりさ世を渡る者の
多うるる。塩焼文太夫とやへへ。由緒ある家系
をて代々此演進は佳。頗る家富豊ありて何暮る
を。奴婢許多召使ひ時々さるが。荆婦の先の
死本。今歳十六なるる小磯と呼る一人の處女を
蝶花と愛慈とよた婿兼をとり。栄々末を見



ん。其のそ強樂くもろが未斯る斥鄙なり。文太夫が
望みも小碓が心も叶ふ者もなくて黙止ぬ。然る
いつの比より此濱辺へ兩個の無頼子来りて住
この兄弟より字を牛頭六馬頭七と呼ぶ。力量
衆ふ秀よく剣法も熟練せりといへり。如之を酒をこ
く色を貪り。豪放俊邁殆ど袁彦道が徒といへる。
斯るこれが浦辺の壮佼等の食渠が剣術柔術の
弟子とる。兄弟を称へて義父と唱へ難兄とあかむ
るものうら。渠等いふ勢をあるひ一村を横行く
て萬恣に進止といへとも。此比のひの天下穩るらば

殊に都近くとことろよりて遠く陸奥のそをちのれ。國
の守。縣司も是を制せんととる。至らば此牛頭六
早晚小碓があてやうもの姿も眷戀く。何卒手は
いれんもの。萬般心をなす。方見れ。却説
博雅の小泊りの濱辺にて送る胃中の機密を告
あひく。宗貞と袂をもち。此外の濱を過りてが折
くも宿るべき家もある。黄昏はあひびて。死に困るて
てある。文太夫が家を見つけ。心のうちには是極めて
野の郷土故。又の莊官るん。邸宅あるべし。と大言ふ
飲び傾く門のちより。躊躇て通名を乞ひ。一夜の

舎りしをりこめたる。文太夫が家の奴伯出て何方より。何
方へ通りぬる人ありやと問ふ。博雅偽りていへらく
吾儕を元來洛陽の者なるが画の道殊に執心
て。松島象瀉の風景も見まろく。其道の執行の
爲は遙々と下りてべるものなりと言入る。東道主
文太夫の頗る文学も有り。且娘小磯。丹青の伎を
好とけれど。る片邑村落の師として。学べば人
もるく。年来るれを愁ひ居りし事るれが。今博雅が
画工ありといふを以て斜る。故に傾て奥に招
いて。先其人物を見る。流石に三位の官みゆ

昇りし人なるが。今寔に姿るが。所謂泥中の
蓮。砂中の黄金あり。言語店。京都で田舎人の類
はあらねば。文太夫のあづ十分渠を愛する情ありて。
叔其姓名を問ふ。博雅の実名をいふ。只そくがと
呼る者ありと答へられ。文太夫も是究て由緒ある
人の。親の勘氣るんとせめて。詮術る。此所
吟行ものなりと思ふものなり。強て其種姓を問ふ。
最他。まなく管侍して。其書画を試る。書の大
様ふ。草書拙らに。画も。花鳥人物山水何
もよれ。需は應じて工とみ画く。此比世は多

有るべしもの覺へど。丈太夫の是と観て限る。歡
ひ。年末の望よりぬと弥礼を厚くして。處女小碓
を弟子とす。推らく此所は田より。衣食の事
よこみとらひひらせんと。余受くることわづらひ。從
來博雅もさして行方とても定まらぬ旅め。あつた。
丈太夫がゆめが隨意其所よとふなり。小碓は画の道
を教へくる。是や遠て近きもの。男女の中。清女が
筆のよきとも宜なるる。小碓の博雅と然る貴人
といふらねど。爰は来り。初より。その男がりの賤
らね。風俗は心地惑ひ。忍の浦の海士の見るゆを

盗とくらぶの山の守る人繁さし。まを窺ひ心の夫と
うさ口説ければ。博雅も望むる身のさね仇めさる
方。心をとむべし。いふねど。岩木より。松が早晩さ
る。さ中とる。朝雲暮雨の契り浅く。比翼連理
と。さういふれ。博雅も身の上の事。あつた。心な
ら。世の羈はつる。れ。丈太夫が家の離室は暫
らく日を送りぬ。然る。此程いふ事。あや小碓
不圖怪し。病は。卧せり。其病といふ。い。何ともなく
髪。の。毛。空。さ。ぬ。は。翻。く。蠢。く。み。ぞ。丈太夫。大。驚。
さ。こ。は。金。く。只。事。は。あ。ら。い。神。の。崇。は。あ。ら。い。物。



の怪の業ならんとあらや。神は願ふは禱るといへ
 ども更なる底驗る。從來くる奇病なれば醫
 はねきて見せむれども。昔より醫書にも見へ
 草根木皮の及ぶ所はあらばとて。皆断るふを小
 のありふもあられど。いなる宿世の因果ありて。かく浅
 猿病は犯さる事よ。とこれと苦は病て物もさる思
 いふそ。殆ど命もあやうきを見へふ。不題項日無腸
 道人といふ一個の僻道士あり。其齡の古稀は近く
 鬚髮都て真白よりて雪を欺く如くるれど。却る
 其容止は廿歳許と見る。是るん不老不死の

を吞る所の仙人ありといひて。遠近を徘徊
 て人の禍福吉山をトひ。或は物怪瘧病の類を
 咒する事神の如くして。彼首此首は招くれ加持祈
 禱を頼む。一ツとして治せしといふ事なりと坐へる
 うそ。丈太夫は太さな歡び。頓て彼無腸道人が旅
 宿よといひて。娘の奇病の容子を語り頼むれど。
 道人の一談は及ぶ。美諾して丈太夫が家に来
 るひく。博雅の獨り離室は在て此時と交心
 思へらく。神佛の靈驗権者の奇特疑ふべし。あ
 ねど。正法は不思議なりと彼無腸とやうなり。道

人も実の神仙のありてつらばと物の有り物色
 入る。彼道人の村人等許多の案内せられて徐々
 入る来る所情見る。奈何あまふ。遠くは
 顔准髪ゆて瞳の光り人と射て凡骨ならん。頓
 て文太夫の慌忙く走り出て恭しく札をさる。
 小姐小碓が卧房は誘ふ。道人の懐より何やらん
 錦の飾は物ととり出して小碓に戴かせ。清
 と紙と筆をさしてこれに梵字とあつてね。扱ひ
 符を水に入その水をめて髪のをよく洗う。忽常の
 如くあらんと云ふ。文太夫歡ひ傾く。道人の教へのごとく

くする。不心候や髪の逆立事頰は直うて元の如く
 うつたれを。文太夫の更なり。渾家の喜び大くなら
 る。寔は真の仏菩薩の化身なり。さうてごま信心
 して。居る村人們の隨喜の涙を流し敬ひ奉る。
 まふ。文太夫も其道德の掲焉を感激し。且誓く
 音假が家は逗留してありんか。と理なく引とち
 て道人は又一間なる別亭は居らる。是朝
 幾ひ冊を讀み。博雅に此爲体を得と見えぬ。
 愈怪く。這奴が持る錦の袋の内はこそ子細を
 ありん。奈何もして奪ひとりて見をやと思へど。

そのひま 其間を得む。小姐小磯のそつち。さうくといひて三
 四日も過たれを沐浴。髪をあげると平素の如
 くちうりたれ。是偏は道人の蔭なりと共侶は喜
 朝夕いとやわやうに給事して敬ひ。さうさる。尔程は
 小磯の此程病著よりて又く博雅に遇さる
 夕。或夜私に忍び来り。あめやうに詣り。序博
 雅の小磯に對ひ。彼道人といふ者奈何して。怪
 こそ著る。你朝夕渠が近く給仕し。の人の這奴が
 睡るどせ。いとほあら。彼大切なり。所持るに錦
 の帟は入し。物を奪ひ。うて昔。一見せぬ。

とり。小磯の通都人の律。一返は有難人。と
 のと思ひ。居る事なれ。斯と。大さ。駭と。
 外の事あらん。奈何六借事なり。君の宣ふ
 事の背き。さう。彼道人の宴は。活如未
 ふ。其大切なり。拵る。定め。尊さ
 物あらん。それ。凡夫の身。て。掠り取
 る。と。妻の。君も。奈何。罰の當らん。と
 図り。これ。思ひ止。て。人。といふ。
 博雅の氣色を。変。你平素より。未の女夫とあら。と
 神。追誓。うけ。縦父の。けむ。と。

你の言書きし。吾の你の夫ありとや。其夫の
 付る事と。妻の身と。善いよし。悪いよし。其
 といふ事のあらば。や。你倘道人の錦の帯を取
 似て見し事。夫夫婦の縁。今宵限る事と
 最強面する。小残の悲。吾妻君の仰。固
 辞を乞ふ。彼道人の凡人。ありと。君の
 此身の上。いふ事。過もあらば。思ひ過して。身
 いらし。抑。尔斗りの事。より。夫婦の縁。今
 宵限る事と。宣ふ。余といふ。強面の心。従来
 君の玉。都と。やらん。いと。國。産。

といふ。身。妻。天。離。鄙。か。者
 在。當座の花と見る。君の方。う
 隔。心。と。唧。く。怨。詞。博。雅。の
 々。吾。何。方。う。絶。へ。隔。心。何。と。て
 斯。恨。と。小。残。の。否。隔。の。證。据。の。君
 常。又。肌。身。と。放。玉。に。大。切。の。持。の。帛。紗。包。あ
 り。定。二。世。と。誓。ひ。四。方。より。又。環。會。の。期。の
 印。と。贈。り。の。品。は。こ。そ。あ。ん。ど。ん。倘。然。る。い。は。女。の。念
 晴。ら。し。帛。紗。包。の。う。ち。と。見。せ。な。へ。と。博。雅。の。心
 中。此。處。女。の。帛。紗。包。と。日。外。小。泊。の。濱。辺。は

く得たり。一體の事なるべし。従来なるで色と隠
こべさののちあらねど。吾一箇の功を立べし。便りの思
へば。忘る。物より肌身と故に。野持るせり。去りて
女童。斯るものと見せるが。驚き恐れ人。吾と怪しむ
べし。且偽りて期とのむ。其後又尤も右なるをべし。と
傾て懷より。彼帛紗包と拿出し。你が怪しむ品の
是なり。やと。いふ。小磯に見るより。夫よりく。あり。妬ま
し。や。その中の物。妾は一目見せんと。遽しく取らん。と
と。と。手早く懷におさめ。打微笑。此品の次して。然
る類の浮る物。あらば。さ。神の守護れり。と。

ど。今白地は開きて。見せ難う。你首尾よく。彼
道人が。錦の帛と奪ひ来らん。奈何。此裏を
見とべし。と。いふ。小磯。打点頭。然。君の見より。し
と思ひ。物ら。ん。罪も報も。奈何。彼品を盗
と。取て。見せよ。い。其時。又君。今の帛紗包の裏
を見せぬ。と。固く。辭。と。つ。傾て。巫山の夢。い。ぬ。
此博雅が。居る別室と。無腸道人が。居る別。間。と。中
庭。一ツを。隔て。對合せる。り。當時。無腸道人。愛。忍
ひ。来。りて。障子の。間。より。裡面の。動静。と。物色。ひ。又
兩個が。此。数行の。情話。を。竊。し。て。獨り。心。は。打点

牛頭六



馬頭七



小いそ

文太夫

頭づきのさし閑さしは立還たちかへるね畢竟ひつじやう此道人このどうじんが心善こころよきなるる惡わるるる。その次つぎの條じょうと讀よみて知るべし

第拾六回

狡猾推婚入

茲ここは又また彼無頼子あつちのあふまゝ牛頭六びやうろく。此この程ほど丈太夫ただうが計はかりは雅がが寄食きしきしてあるよりとて出いし。弟馬頭七あとうちを始はじめめ友達の惡漢血あつちのあふまゝの池赤三いけあかつさ。飯いの山平やまへい。三途川さんずがわの姥八うばやち。なんとりとの輩たぐひと集あつめていへり。吾われ儼げん豫よてより塩焼丈しほやきただ太夫ただうが處女むすめ。小磯こいそと手てはいれを思おもへ。有あ繫きは渠そのの此所このところの旧家きうけあるより。そを絶きて思おもへ。いあらねと勢いきなりをゆて迫せまらん。い意路いじの情薄なさけなく。閨中けいちゆうの趣おもむきなりと思おもふ

りのうら何卒なんぞ可然かな氷人ひやうじんもがると今日けふが鳥とりまで等みじか打捨うちすておこし。比日ひふやは種姓しゆせいも得えられね。洛人らくじんとやらん。生なまあらけり。青年せいねん漢彼所このところの家いへは食客しやくしやうとあり。は。彼毛青年このけせいねん奴娘めいぢやう小磯こいそと情由じやうゆありと知る者しるものありて吾儕われらは告つぐ。倘手もしてのび延のびつて這奴このやつ等を婿兼むこかねみでめする時ときは。吾是この近き此浦このうら辺へと高たかくし。鼻はなをへてぬさるる。似に。因よて思おもふ。今鳥けふ我推われおしる酒肴しゆぎやうと齋いひら。丈太夫ただうの家いへは。い。ちて是非ぜいひとも僭おこるらんと思おもふ。此この義ぎの奈何いかん。有あるべきぞ。傍若無人ぼうじやくぶじんの一言いちごんは各位あひひ無な法はふの破落戸やわらくこ。們らるれば。い。よ。義父あやふちの思おもふ。我われも共侶ともりふ

行て祝言の賀酒の内地走るるべしと頓て太さ
ゆるるる白木の臺は尾紙つけたる赤目魚を載せその
外毒苗女家内喜持米納の品調ひく牛頭六
馬頭七の縞荒さ丹前布子のうゑは麻様と着して
おのく長と両刀を横へ同朋の者共は件の品とり
さるるを懸く文太夫が家は動哉と推こめ太夫が
家よの肝と消しこの何事やと家の奴伯恐るく
出迎て其仔細と問ふとき馬頭七進出ていらく名
乗らむとも兼て見識てやあらんとぞん近來より此浦辺
へ來て住る兄弟の者なり然るは我兄牛頭六ぬし

この四寮人小磯どのとやらんと不図垣間見て深く意
慕へど尔るべき氷人あるうじやへ今鳥追の黙止せし
うど今鳥の思ひよとて懸く来りしつけ脩兄
弟兩人で水ゆらげは結納の品迄齎らしし此由縁
東道主は言せ目録通り受納る疾婚姻の準備
さね俄頃のことにて手も足らじと思へ義子の誰
追皆引連て請来り然にいへい内祝言一汁は菜
の烹割のいらじ定法通りの蛤吸物さ前生の
入る海中より閨中の其管待こそ肝要なれと戯言
るがらのこととてとゆふ奴伯の大さな駭と慌忙裏

面より入る斯と東道文太夫は告ぐれば文太夫の眉を
 顰め豫て咄めゆく無頼子通例の事よての返り
 して。転て四金方金と高杯より高く盛て携え入
 持やう蒸襖をひらきて徐として出惡漢等又對ひ
 只今執達者が口伏して委細の容子の審はゆづ先
 の醜さ吾侪が女と執心とい。親の身よりして何事
 らねえあんな然にいへ女のひらいて簪さう。男子の三十
 室ありとも。小磯のいさ。其年僅十六あれが今少
 早う。如之吾侪が家の塩と焼をりて活業とさる。你
 達たちの如く両刀を夾くわし人ひとと婿むことして何なんのせん。

太おうあうら故意こぎ。来きませし志こころの嬉うれしけれが何をか
 管待くだんたいせんとと思おもふ。斯かくる片鄙かたはなあれば心こころもさうは是これの
 吾侪われらが寸志すんしの茶菓子。刀松達とうしょうだの口くちのあめりれど。
 これを口取くちみ茶ち茶ちありとも喫くし。いいと怒おこしと休やすみ還かへり
 給たまふ。最平さいへいは説といて立たんとさる。牛頭ぎゅうとう六むの最前さいぜんより
 然しかして文太夫ぶんたふの事ことさる。居ゐりしが。當時たうじ刀やの劍けんをも
 てある。櫛くしと焚もとをかき。眼めを垂たりし。声こゑを荒あららげ。汝なんが
 老老らうらう何なんぞ吾侪われらを侮あなづること如此かく甚し。さや日向ひなた臭くされた汝
 が娘むすめを所望しよぼうふと難有なんいうとのあもる。て人ひとも知しる。古ふる
 詰いと鳴呼めいこがう。く言い出て推辞いかりのさう。金銀きんぎんをもて

顔ともらんらん。流石の陸奥のそとに育ちし田舎人な
れ。縦や吾輩退糧しつゝも。武士あるのみ争う黄金の
目もつけんや。望みありと踢返せり。田舎方金の四丁は
飛ちし時しもあるぬ山吹の花を散らせる形勢なり。文
太夫も氣色さう下り出れけりあがる奴等もあ
塩焼あがり先祖の由緒ある家系なる。此文太夫が偕
みあらんあんな案外無礼の白痴あり。疾速らる塩焼
の荒士児ども分付てうらさる見せんと救国は牛頭
六つより大さな怒り。憎た東道が廣言うる物ありとせ
ど奥へ踏込。女を惹立来よう。と下知ぬ馬頭七が

心得しつゝと小碇が部屋と思し一問へ入るを見へ
奈何のあらん裏より三間許投出され闕み面を打つ
けて起るあがりぬ形相も繞り飛入牛頭六の腕をね
あがり立出るなり。と見れば是別人にあがり近習より寄食
する。洛の画工博雅なり。文太夫の大いなる喜ひ。この洛陽
客いつの程ふつゝ来りて這奴等が懲らしめをいふ
と問ひ博雅の孫にあがりたる彼牛頭六も筋斗うつせ。頭
轉倒と投のけて東道も對ひていふふなり。吾等今離坐
敷は有るが何やらん母屋の方を當る人声さる。
不審来りて竊は容子をみえ云々。と奴伯の舞斯



牛頭六馬
頭七博雅
を殺さんと
そかる



此乃傳記終卷之三

あるべしと思ひし。ゆへ小碓ぬき。吾常は居る離空
 歌へ落し。吾侍跡に入り。居る。將て
 吾思ふは達。無頼子等。今の狼籍。そこを脱る
 立給。然。い。諺。み。い。兒。み。棒。打。對。人。み。足。らぬ
 奴原。め。你。這。奴。等。み。つ。ら。み。を。疾。奥。へ。行
 る。目。を。も。て。夫。と。知。ら。れ。ば。大。太。夫。の。さ。心。得。然。ら
 客。人。此。場。の。か。さ。り。計。ら。れ。う。と。言。捨。て
 こ。入。り。跡。は。牛。頭。六。馬。頭。七。此。時。漸。起。上。り。
 抑。汝。何。奴。め。吾。侍。等。と。辛。目。み。あ。い。せ。ど。洛。の
 客。人。と。あ。る。娘。小。碓。が。情。人。歟。然。あ。ら。免。

難。已。命。も。寐。腐。る。觀。念。を。ろ。げ。老。右。より。破。て
 う。る。さ。う。い。く。刀。も。さ。う。い。く。打。兩。人。を。あ。う。う。打
 態。首。筋。つ。う。ぐ。外。面。へ。投。出。お。の。れ。ら。兩。腰。を。帶
 酒。と。賭。博。月。月。を。送。り。何。と。定。る。活。業。も。あ
 思。ふ。本。歲。出。羽。の。國。も。藤。原。の。館。み。て。微。妙
 杜。騙。を。し。又。今。年。當。國。淺。香。山。の。辺。り。小。野。の。後
 室。が。法。筈。の。折。ら。り。怪。た。曲。者。あ。り。専。ら。街
 の。風。説。う。る。も。同。類。あ。ら。ん。引。捕。ま。て。亂
 明。せ。が。何。れ。埃。の。出。る。や。あ。ん。説。く。詮。美。せ。る。や。あ
 然。あ。る。時。東。道。の。前。の。迷。惑。も。條。も。あ。り。あ。ん。

今鳥の此終歸とある命昇加の和郎共う是も
汝等が何所みてう掠奪てうせと物もあるべ。疾持返
れと指者と瓦落離いと門外へ皆放下と出し。
貫木さうその裏みぞ入るる道の牛頭六馬頭七
も呆れとて居りし。漸く博雅が入りてを見。牛
頭六跡を信とありて已言分ある奴あれど。そこをいふ
小生の持まへせ風流男の黄金は乏しく力のあら
こそ定まれ。倡共侶みいらたさん。皆来よりし。齋せ。来
納の品提つ。いと見苦しくも立出。壹町余も来
し。何思ひらん牛頭六の弟が耳み口とよせ。私語打

頭兄弟兩個持脱捨引よりぬ。美弟は持せて先へ返
し。尻引らびて手拭みて。面を包とさ。是あつ。太
夫が郎へ立戻。裏手のうへ。思ひい。ぬ斯と。さ
ぬ文太夫博雅が今の傷を得と見を。奥より
立出。宴は文備あるも。武備ありと。あらん。保の尺画
事を嗜る人とのと思ひ。雄。敷進止感。さる。い
余あり。悪漢等が緯故さく還。う。これ全。く。保の
賜あり。その悦び。一献。飲ん。娘の奈何あど。て。此。場
みい。で。博雅。ぬ。厚く。礼を。述。さる。娘。と。よ。ひ
立。る。み。阿。唯。と。應。へ。て。小。段。の。娘。と。く。走。る。来。る。面

もむげ。唐伏拜ひ斗いあり。婢女們的に心得へて
んでふ銚子盃持出。博雅は酒をさぐめける。當時文
太夫の打微笑つ。博雅は對ひ斯い人も最嗚呼
あがら。昔脩も先祖の武士ふて。鐘一本の主ふもあ
りね。然ぬと時移り世変りて。わう民間はあちうめ
ども。緯ある時の今もあさ。兩刀を帶り。你頼りくば長
く此國ふ止り不束ふりあるべけれど。娘小磯と夫婦
ふさう。我送跡を相統し。ての給りるや。と思ひこん
る。形相ふ小磯の最も嫉氣ふて。実ふ家子大人の
粹ある詞。や。博雅ぬ。疾應て。と。取く。さる

打忘れてそ言ひぬ。博雅は是をゆりも。この難有
れた詞ある。何と。包もへらん。昔脩の深き願ひの
有る身ふ。あれ。今此所みて。その更。む。み。引
る。一旦洛陽へ還りしうへて。左も右も術あ
らん。と固辞る。さるは東道主も領た。いうる。容子あ
けふ。你的種。社辞。め。を強て。い。日。と。老の心のせ
くる。く。思ふ事。言。る。の。こ。必。心。ふ。け。め。あ。と。い。ふ。
娘の望を失ひ。さる恨。け。は。死。目。み。て。時。博。雅。
白眼ぬ。斯く酒をあら。め。者。を。次。燭。を。秉。く。盃。を。
ふら。と。程。ふ。思。ひ。の。外。は。更。け。て。寐。よ。との。鐘。鳴。

響く。響く。響く。駭た。そこへ酒。燕を。かき。各々。目
 り。ふ。り。時。こ。を。来。つ。れ。と。裏。手。に。る。数。垣。り。り。り。
 破。く。頭。れ。出。く。牛。頭。六。馬。頭。七。昼。の。恨。を。返。さ。ん。と。
 叫。合。て。博。雅。の。居。る。離。室。へ。窺。ひ。よ。る。思。ひ。つ。け。た。後。
 の。方。穴。生。の。小。六。穴。生。の。小。七。暫。く。俟。ね。只。一。言。示。
 した。事。あ。つ。と。本。名。呼。れ。て。驚。と。し。て。兩。人。の。あ。と。
 へ。と。見。え。ぬ。り。童。顔。白。髪。異。相。の。道。士。飄。然。と。し。て。
 佇。立。し。り。

半月夜話後篇卷之三

